

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長名

(公 印 省 略)

病害虫発生予察技術情報について

令和5年度病害虫発生予察技術情報第8号を発表したので送付します。

令和5年度病害虫発生予察技術情報第8号

野菜類における菌核病の防除対策について

野菜類における菌核病は、12月から2月の低温多湿時に多くみられるようになります。また、出荷後に市場等で発生する場合があります。貴管下における防除対策のご指導をよろしく申し上げます。

1 発生生態

- (1) 本病は被害部に生じた菌核が土壌に落下し、伝染源となる。菌核は低温多湿条件下で容易に発芽し、胞子を多数形成し、周囲に飛散する。
- (2) 本菌はさやいんげんやレタス、キャベツ、とうがんなど多くの植物を侵す多犯性で、連作畑で多発しやすい。
[さやいんげん]: 株全体(茎、葉、莢)に発病し、水浸状の病斑を生じて軟化し、続いて白色の菌糸を密生し、のちにその表面に黒色のネズミ糞状の菌核を形成する(図1)。
[レタス]: 外葉基部から発病することが多く、褐色水浸状の病斑を生じ、次第に広がって株元から腐敗し始める(図2)。
[キャベツ]: はじめ地際部が水浸状に腐敗し、その後白色菌糸を密に生じる。最終的に株全体が茶色に乾腐し、表面に黒色の菌核が形成される(図3)。
[とうがん]: 花卉、茎葉に発生し、水浸状の病斑を生じて軟化腐敗する(図4)。
- (3) 罹病部との接触等により発病し、蔓延する。
- (4) 低温期に施設内が密閉されると多湿になり、結露が生じ多発を招く。
- (5) 窒素過多や密植、過繁茂な状態は、発病を助長する。

2 防除対策上注意すべき事項

- (1) 発病株、発病部位は、菌核が形成される前に早めに除去し、ビニール袋に入れるなどしてほ場外へ持ち出し処分する。
- (2) 排水を良くし、施設では十分に換気を行い、多湿にならないようにする。
- (3) 補植や植替えを行う場合は、発生源となる地際部の菌核を残さないよう土壌ごとほ場外へ持ち出し処分する。
- (4) 多発ほ場での連作およびキャベツやレタスなどの本病が発生しやすい作物での輪作を避ける。
- (5) 出荷後に市場等で発生する場合もあるため、ほ場での薬剤防除を徹底する。
- (6) 発生がみられたほ場では栽培終了後に天地返しを行う。



図1. さやいんげんの莢の病徴



図2. レタスの病徴



図3. キャベツの病徴



図4. とうがん茎葉の病徴